

週日の説教

金 大烈 神父 2011年9月27日(火)

《自分の中の暴力性 ～み言葉や美しい体験によってなくしましょう～》

今日の福音(ルカ 9:51 - 56)は、簡単ですが、意味のある物語です。

サマリアというところについては、既に説明をしたことがあります。

サマリアは、北イスラエルとユダが別れた時に、北イスラエルに入った地域です。しかし、アッシリアという大きい国に侵略されて、アッシリア人とイスラエル人の混血の国になってしまいました。しかも、ユダヤ教のヤーウェ神への信仰より、異邦人であるアッシリア人から受けた信仰を持っている人が多い地域でした。北イスラエルの人々も南のユダの人々もエルサレムを聖なる都と考えて、いつかそこに集まって神様を賛美しなければならない、とっていました。しかし、サマリアの人々は、別のところを聖なる都として決めていました。だから、北イスラエルも南のユダもサマリア人を同じ民族として認めず、冷たい感情を持っていました。兄弟としては認めず、どこから来たかわからない悪い群れと考えていたのです。

しかしイエス様は、「それは差別なのだ」と教え、優しいサマリア人のたとえ話をしてサマリア人も私たちが抱き締めなければいけない同じ民族であることを弟子達に訴えていました。

そのようなイエス様の姿を見てきた弟子たちが、エルサレムに入るために道を通ろうとしてサマリア人に断られたのです。サマリア人としては、今までイエス様のことを預言者として好意を持っていたのに、この人もやはりエルサレムに行こうとしている、と考えて断ったのです。イエス様がエルサレムを目指して行くことが気に入らなかったのです。また、イエス様がエルサレムに行くために通ることを認めたら、自分たちサマリア人の信仰も崩れてしまう可能性があったのでしょうか。それで断ったのです。しかし弟子たちとしては、こんなに親切にしてあげたのに、ただ道を通ることさえ邪魔するなんて、と腹が立ったのです。

そして、弟子たちの心はどうだったのでしょうか。イエス様と行動を共にするうちに、いろいろな奇跡を起こす力、人々をよい意味で先導する掌握力を見ていたのでしょうか。だから気づかないうちに自分たちにも力があるような気持ちになったのでしょうか。それなのにこのように邪魔をされ、気分を悪くしたのです。そこで、イエス様に向かって無意識のうちに「天から火を降らせて、彼らを焼き滅ぼしましょうか。」という生意気な話が出てしまったのです。十分に理解できることだと思います。もし、私たちがついて行こうと思った人が、そのような能力のある人だったら、私たちも同じように力があるような気持ちになります。

ここで私たちが考えなければならないのは、全ての人間の中に隠れている暴力的な部分です。私にはそのような暴力的な部分はありません、と言える人はいないでしょう。人を殺すことだけを暴力と言うわけではありません。憎しみから始まる全ての感情を暴力と言います。

どの国の人々でも、一人一人に接してみると優しさを持っています。しかし一度戦争になれば、想像できないような暴力的な面が人々の中から現れます。それは、その民族が悪いのではなく、環境が人々の中に隠れている暴力的な面を出させるのです。どんな戦争でも、一度起こると「こんな残酷さが人間の心から出るのか」と思われます。しかし私たちも、そして優しいと言われる全ての人も、そのような環境の中に入ったら、自分でも知らないうちに暴力的になってしまうのです。

今日の福音を通して、私たちは、自分の中に隠れている否定的な感情に警戒しなければいけないと思いました。そしてそれは私たち信仰者にとっては、祈ることです。祈りによって、み言葉に接しながら、できるだけ美しいものを見て体験しながら、自分の中に残っている暴力的な部分があれば、それを殺すのが正しい福音的な生活だと思います。

皆様は感じられないかもしれませんが、信者であっても、気の合わない人同士の間で見られる暴力性は、司祭の目ではひどいです。なぜこんなきつい話をしなければならないのか、なぜこんな反応を見せなければならないのか、とすることがあります。私たちはみんな、そういう否定的な人間性を持っていることを意識すべきでしょう。そういう面を認めましょう。相手が嫌いになってしまったら、心の中で働くのは暴力です。どのようにしたら効果的にその人を責めることができるか、そういう姿が、遠い国の物語ではなくて、今の私たちの中にあることを認めましょう。

ありがとうございました。